

試験研究機関の調査結果について

1 調査の実施状況

期 日	調査した試験研究機関名	視 察 委 員
平成 27 年 9/14 (月)	農業試験場 果樹試験場	清水久美子委員 樋口一清委員 山田千代子委員
9/16 (水)	環境保全研究所	才川理恵委員 樋口一清委員
10/13 (火)	水産試験場 林業総合センター	大槻憲雄委員 中條智子委員 中山千弘委員
10/15 (木)	工業技術総合センター (技術連携部門、材料技術部門、食品技術部門)	腰原愛正委員 才川理恵委員 山浦愛幸委員

2 主なご意見等

- ・実際に視察してみると、試験研究機関がそれぞれの分野において重要な研究を行っていることが分かるが、試験研究機関が日頃どのようなことを行っているか一般の県民には分かりにくい。研究成果や取組についてもっと PR すべきではないか。
- ・県全体での試験研究機関に関する一元的な広報体制を強化していくことも重要ではないか。
(主に広報は研究員が行っているが、広報のプロを活用して PR を行ったらどうか。)
- ・各試験研究機関とも、夏休みなどに試験場の一般公開などは行っているものの、実際に足を運べる人は限られる。例えば、環境保全研究所自然環境部での温暖化ウォッチャーズやサイエンス・カフェなど、研究部門と市民の交流を促す取り組みも、研究所からの情報発信手段として重要な役割を担っていると考えられる。
- ・試験研究機関について、事業者や創業意志のある者が気軽に利用できるような周知・PR が必要ではないか。
- ・県の試験研究機関相互の連携や、大学、民間企業、他の試験研究機関、関係する行政等との連携を一層進めるべき。
- ・他県の試験場等との比較、民間関係者の評価などの外部の視点を加味した評価手法を検討・確立すべきではないか。
- ・機能面での充実や人員の効率化のために、試験研究機関の相互連携、組織的統合など、効率的な組織体制のあり方を検討していく必要があるのではないか。

試験研究機関の現地調査に関する委員からの意見・感想等

1 農業試験場、果樹試験場

- ・両試験場とも、食生活への直接の貢献が明らかであり、その活動の重要性について再認識できた。オリジナル品種の開発、低コスト・省力化・安定生産技術、環境面での取り組みなどのテーマについて、実績を上げてきていることが理解できた。
- ・とりわけ、温暖化適応策が農業分野での大きな課題となりつつある。スタッフの人数に制約があること等を考慮すると、この分野での知見を蓄積しつつある大学や他の研究機関との連携・協力を一層強化していくことが重要と考えられる。
- ・例えば、新たな酒造好適米（酒米）のオリジナル品種の開発については、酒造組合との連携を行っているとのことであり、今後とも、ニーズを踏まえ、民間との連携を図りつつ、積極的な事業展開を期待したい。
- ・両試験場の役割は、全体として地味で、時間を要するものが多く、短期的な広報や評価システムはなじみにくい面もある。広報活動については、試験場の一日公開や研究発表に加えて、県全体での試験研究機関に関する一元的な広報体制を強化していくことも重要であろう。
- ・評価に当たっては、他県の試験場等との比較、民間関係者の評価などの外部の視点を加味した評価手法を検討・確立すべきである。
- ・業務量に比べ、人員が極めて少ない。試験場については、地球温暖化の進展など、農業全体に関わる問題が深刻化する中で、人員体制の強化、専門的な人材の育成、他の試験研究機関や大学、民間企業などとの積極的交流などが重要課題であると考えられる。
- ・北欧諸国では、近年、農業部門の競争力強化の観点から、大型の植物工場や栽培型漁業など、IT技術を駆使した先端的な取組が官民を挙げて行われている。農業が基幹産業の一つである長野県においても、試験場がこうした役割をリードできるよう、思い切った体制の強化を検討すべきであると考えます。
- ・初めて農業試験場を視察し、温暖化が進み、食生活が多様化する中で時代をとらえ、前向きに研究に取り組んでいる様子を伺い、感動しました。以下気づいた点について記します。
 - ① 米離れが著しい昨今、県内の酒造会社と連携し、酒造好適米の研究を進めていることは、大いに評価するものです。これからの社会は、いろいろな面において一か所のみで物事を進め、物を作るということがより厳しい時代となることが予想されます。説明によりますと他の機関との連携は、緒に就いたばかりのようですが、今後、温暖化、災害等への対応が強く求められる中で、連携コーディネーターを配置し、積極的に進めていくことを望みます。
 - ② ぶどうの最盛期を迎えました。今年は農業試験場で研究されたナガノパープルは、特に、人気を呼んでいます。しかし、試験場でどれだけの年数をかけ、研究した成果なの

かということに、思いを寄せる人など残念ながらいいと思います。これからリンゴ3兄弟が出荷されるようになると研究者のもっとも誇りとやりがいを感じる季節となるのではないのでしょうか。もっと県民に自分たちがどんな思いで研究を進め、苦勞し、果実にしたのか知らせてほしいと強く感じました。研究発表等もされているようですが、もう一工夫欲しいと思います。なお、子どもたちに向けては出来上がったリンゴやブドウを見せるのではなく、経過を学習させることにより、農業に関心を持たせ、生産する喜びを体験できるものと考えますが・・・。

研究員の数徐徐に減り、研究課題が増えても、それに対応することが難しいのではないかと感じましたが如何でしょうか。なお、生産物をセンター内で販売し、地域の方が自由に出入りしており、地域に溶け込み、地元の住民との一体感を感じました。これからは官民一体となり、長野県らしい研究成果をあげることを期待しております。

- ・ 県の産業や県民生活への貢献度は高いと思います。
- ・ 信州の気候風土に合わせた研究がなされていると感じた。気候変動に合わせ、作り手に合わせ消費者のニーズを考えていると感じた。其々に〔場長、研究員〕を置き、実労働部分では地域の雇用にも貢献していると感じた。
- ・ 年数を要する地道な作物育成の作業工程コツコツと実施していると感じた。
- ・ 農業従事者（生産者）の多様化も考えている。機械化にはそれなりの工夫があり、若者が魅力を感じる作り方、工場生産のような農業、農業従事者の高齢化に対応した農業。グローバル化していく中での工夫を説明や見学で感じた。
- ・ 試験研究機関相互の連携は知的財産の保護、活用を考えながらより県民目線で進めてほしい。
- ・ 成果の発表報告会などは、全権的に知らせて浸透させるには県広報課などと連携して、マスコミへの売り込みも積極的に、若い人にはIT使用も可。農業高校では本当に感心させられる研究実験をしています。学生への働きかけも良いのでは。
- ・ 成果の評価は直ぐ出るものと、時間が経って評価されるものがある。農業、果樹共に今のように地道な研究を続けることで評価に繋がると考えます。
- ・ 知って頂く工夫が大事。

既に実施されているかも知れませんが、県下の子供たちの体験会など行う。

南信の学校は北信地域で、北信地域は南信へ、これからの農業を考えると、長野県民としての交流（地域性を身をもって感じる）が必要かもしれません。

- ・ おいしい信州ふ〜ど風さやか・これからの信州の酒米・信州ワインどれをとっても農業支援事業は長野県には欠かせないと思いました。

2 環境保全研究所

- ・業務が自然環境部門から生活衛生部門に至るまで、極めて多岐にわたっており、その役割は広範かつ重要であることを改めて実感した。
- ・地球温暖化問題等の近年の状況等を考慮すると、本研究所の業務に関しては、効率性の見地からは、一元的な管理には限界があるのではないかと考える。効率的な組織体制のあり方について見直す必要があるのではないかと考える。
- ・とりわけ、安茂里庁舎は老朽化が著しく、早急な対策が必要と考える。安茂里庁舎での感染症部、食品・生活衛生部の衛生関係業務は、温暖化の急速な進展の下で、その役割を拡大していく可能性が高い。県民の安心、安全な生活を守るためには、温暖化による感染症の拡大など、差し迫った危険に対処するための体制整備が不可欠であると考えられるが、現状は、例えば、感染症に対する検査設備が庁舎の各階に分散するなど、不十分なものに止まっている。
- ・自然環境部や水・土壌環境部、大気環境部、循環型社会部などの業務も、地球環境問題の深刻化によって急速に拡大すると考えられる。全体として、環境保全研究所については、建物等インフラ面の整備、人員体制の大幅強化が急務と思われる。温暖化による深刻な影響は各方面で拡大しつつあり、早急に対策を講じるべきである。
- ・感染症や食品・生活衛生問題、自然環境に関する問題は県民の関心が高い事項であり、広報、情報提供体制の整備・充実が重点課題と言えよう。また、例えば、自然環境部門での温暖化ウォッチャーズやサイエンス・カフェなど、研究部門と市民の交流を促す取り組みも、研究所からの情報発信手段として重要な役割を担っていると考えられる。
- ・地球温暖化の進展とそれに伴う住環境の悪化は、我が国全体の課題であり、国等との役割分担を明確にした上で、農林業への被害、高齢者の健康被害など、長野県に深刻な影響をもたらすおそれのある問題に焦点を当て、重点的な取組体制を構築することが必要ではないかと考える。
- ・自然環境部について
 - ・4つに区分された県政の課題に対し、専門分野に特化した研究員が調査と研究を行っていました。⇒行政の課題対策につながっている。
 - ・生物標本の管理・自然保護対策・学問・研究の証拠資料として保管されていたが、活用の仕方に関しては、疑問がある。
 - ・県民の学習交流・研究の成果を県民に普及啓発するために、研究所を開放しだれでもが見学できるようになってはいるが、立地条件など訪れる人は限られている。市民参加型のモニタリングの実施や、県内で座学講座・セミナーなど県民に対する活動が行われている。
- ・水・土壌環境 大気環境部 循環型社会部 感染症部 食品・生活衛生部について
 - ・分野としては、生活環境（公害対策関係）・保健衛生（健康福祉関係）となり、研究の成果が形となって現れるのは難しいが、県民が安全で安心して生活できる基盤となってい

る事を実感しました。

- ・食中毒・ウイルスの発生など、何か問題が起きた時には行政の対応として注目を浴びるが、県民の安全を担保している重要な機関。(安全と安心は違うものなので、不安だからといって全ての物に対して検査を要望するのではなく、検査には時間や費用がかかる。) ⇒検査結果や、数値など県民に対してわかり易い情報提供
- ・課題として挙げられていましたが、施設の老朽化に対応が早急に求められる。

3 水産試験場

- ・海なし県にとって貴重な試験場である。特に信州サーモン、信州大王イワナともに成魚を見たのは初めてであり、驚いた。この研究成果を県のブランド確立「おいしい信州フード(風土)」推進に取り入れ、生産者、観光業と一体となった取り組みが必要である。
- ・研究開発は時間が必要であるが、その成果を速やかに活かす体制を官民一体となって構築すること、また、県民に理解される広報も必要である。
- ・長野県の資源を活かし、本所を含めて4つの試験場がそれぞれに役目を果たし、連携して県の水産事業の発展に貢献していると思う。研究は年月が必要であるが、信州サーモンや信州大王イワナはワカサギ、アユ、フナと共に地産地消の食べ物として期待したい。
- ・農業、観光とコラボして研究の成果を産業として発進することが大切であると思う。
- ・信州サーモンは既に長野県のブランドとなりつつあります。更に信州大王イワナも白身の淡白な味だと聞きました。今後、長野県のブランドに育てる事を通じて県産業に貢献していけると考えます。
- ・国の水産総合研究センターや大学との連携状況は、今回の視察では、はっきり分からなかったが、他県の水産試験場との連携強化で海なし県である長野県の水産業の発展に寄与して頂きたい。
- ・長野県の清流にふさわしい信州サーモンや信州大王イワナなどの開発は評価できる。一方でウナギの完全養殖に向けて農林水産省とタッグを組むなど、先駆的で話題性に富む研究テーマについてもチャレンジして欲しいと感じました。
- ・信州大王イワナの発表が視察直後にNHKでされたので「びっくり」し良かった。と思いました。今後は、食の祭典「B級グルメグランプリ」に出場すべく長野県全体で研究するなど、県を挙げた支援に取り組んでいくべきだと考えます。
- ・研究成果の評価については、試験場のみの責任で行うのではなく長期的なレンジで考える必要があると考えます。
- ・農業の第6次産業化などが話題となっていますが、水産業についても水産試験場(長野県)も一緒に流通・加工・販売の一連の流れを考え・作る事が必要だと感じました。海なし県長野県を逆手に取った長野県水産業を発展させる起点に水産試験場になって頂ける事を期待します。その為には、もっと人員を増員しても良いのではと感じました。

4 林業総合センター

- ・マツタケ栽培、松枯れ対策、県産材の製品化に向けた取り組みを行っている。林業の厳しい現状の中で、国、市町村、民間との連携をしっかりと取り、長野県林業の方向を研究と合わせて活動しているが、県民総参加の方向も必要である。
- ・研究開発は時間が必要であるが、その成果を速やかに活かす体制を官民一体となって構築すること、また、県民に理解される広報も必要である。
- ・様々な研究に取り組んでいるが、一般の県民にはその姿が見えにくいようである。少花粉スギ家系苗木やマツ材線虫病抵抗性苗木の研究には力を入れてほしい。
- ・農業、観光とコラボして研究の成果を産業として発進することが大切であると思う。
- ・マツタケの人工栽培が現実になり、また松くい虫の被害がいつきに減少するなどの目立った貢献がないと県民生活や県産業への貢献が見えづらいものの「森林県」長野の森林を守る活動は地道であり目立たないが、しっかり続いていると感じました。
- ・キノコの栽培技術開発や特用林産物の普及拡大への貢献は素晴らしいと思います。
- ・近年、南木曽の土石流や神城断層地震など自然災害が多発しています。災害に強い森林づくりは県民生活を守る大きな貢献となると考えます。県内森林の特徴をしっかりと把握されている地元林業センターの強みを生かして最重点に進めていただきたい。
- ・県土の8割が森林という長野県においては、林野庁や信州大学農学部との連携は必須であるがその連携は、なかなか見えない。
- ・長野県でのマツタケ人工栽培や松くい虫被害の木材を使った建材など研究が進んでいることは将来に期待が持てると感じました。木が育つのに時間はかかるが、スピード感を持って結果を出して頂けるとありがたいと感じました。
- ・林業総合センターは、広大な森林の中にある施設であり、また高速ICからも近く、眺望も素晴らしい場所にあると感じました。その利点を生かして長野県内外から観光客や体験学習ができる施設(投資)を作るか、既存施設の活性化を考える事で発信力を高めていってはどうでしょうか。
- ・長野県内の広大な林野を国と共にセンターで守っていく重点課題は「みんなの暮らしを守る森林づくり」「木を生かした力強い産業づくり」「森林を支える豊かな地域づくり」ですが、実現する為には、人力的に足りないのではないかと感じました、林業に携わる人々をもっと増やしていくべきだと感じましたし、センターの人員も少ないのでは、と感じました。

5 工業技術総合センター

- ・機器類が更新されていて驚いた。評価したい。
- ・ティスティング棟新築を評価したい。ただし、PRが足りないと思われる。
- ・岡谷のセンターと同様に長野市においても民間企業用の貸事務所を設置し、零細企業では購入できない高価な機器類を利活用する態勢にしたのは大きく評価したい。ただし、やはりPRが足りないと思う。
- ・研究成果についてもPRが足りないと思われる。
- ・信州をけん引するものづくり産業の振興を目的として、(技術連携・総務・材料技術・食品技術)の各部門があり、地域産業の活性化を目指して中小企業の技術開発を支援している。
- ・今回の視察で現場の業務内容を見て、高度な技術・多種多様な保有機器が揃っている事に驚いた。
- ・工業技術総合センターが目的としている地域産業の活性化を目指すためには、利用者である中小企業へのPRが足りないのかと思った。
- ・長野県が元気になる；しあわせ信州；実現の為に他地域の企業誘致や次の世代が長野県で仕事ができる場所を作っていく必要がある。
- ・一般の県民が直接利用するセンターではないが、「しあわせ信州食品開発センター」のように、何が行われている機関なのか 県民に対してのPRも大切。
- ・個々に見させていただいた範囲では素晴らしい設備と課題解決支援をしているように思うが、県民生活への貢献度合いは評価のしようがなく分からない。外部機関の評価が必要か。
- ・県民一般への知名度アンケートなどが必要か。
- ・製造業者、創業意志のある人が気軽に利用できるような周知努力が必要。
- ・自らの研究よりも、県内事業者の課題解決に徹すべき。
- ・機器ごとの稼働率の公表、新機器導入の機種選定について工夫があるのではないか。
- ・水産、果樹試験場などとの連携、組織的統合なども検討していく必要があるか。(機能面での充実、人員の効率化を目指して)